なぜ宗教戦争が起きるのか

東京外国語大学教授 ● 町田宗鳳

● 宗教に内在する〈狂い〉

いずれの時代と地域においても、戦争勃発に至るプロセスは、複雑怪奇としている。一般大衆の耳目に届く情報だけでは、特定の国が戦争に突入する本当の理由は、とうてい窺い知ることができない。ごく一部の政治家と、戦争によって何らかの利益を得る人物だけが、それを知っている。その真相が明らかになってくるためには、砲撃の煙が収まってから、相当の時間が必要である。

たとえば十一世紀末から二百年にわたって、エルサレムの聖地奪還という「正義」の旗の下、中東に送り込まれた十字軍が、じつは失業対策だったと歴史家に判定されるまで、どれほどの歳月を要したのだろうか。

しかしその一方で、なぜ人類社会に繰り返し戦争が起きるのか、という問いかけがあるとすれば、その答えは、簡単である。それは人間が、とてつもなく強固なエゴをもった動物だからである。

かつて私は、『〈狂い〉と信仰』（PHP新書）という本の中で、その盲目的なエネルギーのことを〈狂い〉と呼んだことがある。人間の最も根源的な生命感情である〈狂い〉は、破壊と創造のいずれの方向においても、すさまじい爆発力をもつ。いうまでもなく、破壊的方向の典型は戦争であり、創造的方向の典型は芸術である。

そして、すべての宗教の核心に、この〈狂い〉のエネルギーが渦巻いているのであり、神との邂逅は、その渦の只中に勇気をもって飛び込んだ者だけに与えられる特権である。電気ショックに似た〈狂い〉の体験をもたない者が宗教を語るとすれば、それは思想であって、信仰告白となり得ない。

宗教が絶望のどん底にある魂を救いあげることができるのも、反対に善良な市民を殺人者に仕立て上げることができるのも、その中核に〈狂い〉のマグマが煮えたぎっているからである。

宗教紛争というのは、信仰に内在する〈狂い〉が人間のエゴと結びついたときに発生する社会現象であるといえる。とくに強烈なエゴをもったデマゴーグ（煽動政治家）が人心を把握しようとするとき、宗教ほど便利な道具はない。純然と宗教的信条の違いが原因で起きている宗教戦争というのは、ほとんど皆無といってよい。

イスラム教徒のパレスチナ人とユダヤ教徒のイスラエル人の間に起きている果てしのない戦いも、決して宗教の違いが原因となっているわけではない。オスマン・トルコの時代から、イスラム教徒もユダヤ教徒も同じ場所に混ざり合って、けっこう仲良くやってきたのである。

それを極めて陰惨で、いつ世界戦争の導火線ともなりかねない危険な紛争地域に仕立て上げてしまったのは、中東を植民地主義の餌食にしていたイギリスやフランスなどのヨーロッパ先進国の政治的思惑のせいである。現在では、超大国アメリカの中東地域における権益が大きく絡んでいる。つまり、国家のエゴが宗教の魔性を増幅してしまったのである。

●正義の戦争に利用される宗教

また、宗教はひとつの領土であるともいえる。世界にはキリスト教やイスラム教のように広大な領土をもつ宗教もあれば、特定の先住民が細々と守っている民族信仰のように小さな領土をもつ宗教もある。中には、侵略戦争をしてでも領土を拡大しようとする国家があるように、つねに外に向かって、みずからの領土を広げようとする宗教もある。

キリスト教の福音主義者がその典型であり、彼らの溢れるような情熱のおかげで、ジャングルの奥地に住む人々も聖書を読むようになった。アメリカで強大な政治力をもつキリスト教連合も、また福音主義的な団体であるが、彼らが異教徒の国であるイスラエルを熱心に支援しているのは、なぜか。

それは彼らに、キリストの再臨がエルサレムの神殿の丘で起きるという固い信仰があるからである。そのためには、イスラム教の三大聖地の一つである岩のドームを破壊して、あらたな神殿を建てなければならないと、本気で信じられているのだ。

万一、そういう企てが行動に移されれば、人類はたちまちのうちに阿鼻叫喚の世界に引き込まれるだろう。なぜなら宗教という領土の中で、いちばん大切な場所がどこかといえば、古くから多くの信者たちに崇められてきた聖地にほかならないからだ。その聖地が異教徒に蹂躙されるのを座視している信仰者など、どこにもいない。

もはや天皇を現人神と考える現代日本人はいないと思うが、それでも皇居が外国のミサイルによって攻撃されるようなことがあれば、いくら平和ボケした日本国民といえども、黙ってはいないだろう。と考えればユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地が隣接しているエルサレムという小さな町で、毎日のように爆弾が炸裂していることの危険性がどれほどのものか、容易に想像できる。

しかしパレスチナ問題にかぎらず、いつの時代であっても宗教戦争と呼ばれる争いが勃発するとき、宗教は戦争を正当化するために利用されているだけの話である。国家、民族、個人のエゴが絡み合って、戦争という人間が最も忌むべき行為を引き起こしているのだが、戦場に赴く兵士も、彼らを見送る一般市民も、決して舞台裏の装置を見る機会を与えられることはない。

他国の領土を奪い取らんとする侵略戦争とて、必ずや「正義」の名のもとに行われる。かつて日本が大陸に軍隊を送り込んでいったときも、大東亜共栄圏と銘打ち、広くアジア人民に繁栄と幸福をもたらすためとされたのである。

サダム・フセインがクウェートを侵略したときも、そのフセインを叩きのめすためにイラクに軍隊を送りこんだアメリカも、ともに立派な「正義」をかかげていたのである。その「正義」を定義づける上で、いちばん説得力があるのは、宗教である。フセインやビンラディンが「アッラーの栄光のために」と言えば、ブッシュは「自由と民主主義を守るのは神の意志」と反応し、おびただしい数の人間が命を落とすことになった。

日本と異なって、宗教文化が日常における人間の行動様式を実質的に規定している国が、地球上にはあまた存在する。そういった国では、自分たちの信じる神の存在が人間社会の実在理由と、ほぼ同等の意味をもっているのであり、政治と宗教が完全に分断されることは不可能に近い。たとえ憲法が政教分離を謳っていても、国民心情としては、決して分離されることがない。

宗教的価値を積極的には認めない共産主義や社会主義も含めて、政治的イデオロギーも、理性を超えた形で国民感情の中に浸透しており、それもまた宗教の変形と考えたほうがよい。モスクワの赤の広場に立って、ロシア正教特有のドームが聳えるクレムリンを眺めながら、私はつくづくそういう感慨に耽ったことがある。

厳密な意味で宗教戦争は皆無であると前述したことと矛盾するようだが、そのように宗教という言葉を広義に受け止めるなら、地上に存在する争いで、宗教戦争でない戦争はないともいえる。

戦争が始まるとき、国家主権、領土保全、民族自立、あるいは信仰擁護のため、という「正義」の定義づけがなされるにしても、それは巧みなレトリックに飾られた口実にすぎない。その「正義」を裏づけし、戦争を正当化する上で、いちばん便利な道具が宗教であるわけだから、宗教者は戦争を推進しようとする者に利用されないように、できるだけ自己防衛をする必要がある。

ところが、歴史を振り返ってみると、宗教者は率先して為政者に擦り寄り、戦争協力をしているケースのほうが多い。日本の歴史上でも、世俗的権力と宗教的権力が結託して、戦争を推進したケースは多々あるが、いちばん最近では、第二次世界大戦前に、国家主義的な世情を煽るために、神道や仏教の各派が軍部へ積極的に協力している。

本来は世界平和のために、献身的な働きをみせなくてはならない宗教家がなぜそういう態度をとるかといえば、権力者に自分たちの立場を保全してもらうためである。そのことは、現代日本でもたいていの宗教教団が、与党支持の立場にあることから窺い知れる。

政治家に強烈なエゴがあるように、宗教家にもそれに優るとも劣らないエゴが存在している。彼らのエゴが共鳴しあうと、そのエネルギーは互いに増幅しあい、社会的にも精神的にも民衆に対して、非常に大きな影響力をもつことになる。

● 日本の宗教者への提言

いうまでもなく、現代日本人の大半は宗教に関して無関心である。宗教的価値観が、個々の人間の人格形成に影響力をほとんどもたなくなって、久しい。そのせいか、今の日本社会では倫理的退廃がそうとう進んでおり、凜とした人間が少なくなってきた。

逆説的な言い方ではあるが、国民

の宗教的関心が低いということは、日本にとって幸せなことかもしれない。なぜなら、宗教は民心の凝固剤として、最高の効果をもっており、宗教文化の密度と全体主義的な思潮は、ほぼ正比例しているからである。

世俗的欲望から離れて、神仏への帰依や感謝がなされるというのは、個人の精神生活上、喜ばしいことであるが、その反面、国家としては戦争へのエントロピー（情報の不確かさ）が高まるのも事実である。

現在、日本外交は北朝鮮による拉致問題ひとつ解決できないほど、腰が引けているが、宗教を媒体として国民の団結力が高まれば、様相は一変するだろう。それほど国家と宗教は、不可分な関係に置かれているのである。

そこで私が提唱したいのは、教団組織に依存しない信仰生活である。従来の信仰は、少なからず教団への帰属意識とすりかえられている。個人の精神性の深まりよりも、教会や寺院に足を運んで行事に参加することが、信仰の証しでもあるかのように受け止められてきたふしがある。

宗教には、魂を広い宇宙に解放する働きと、小さな檻に閉じ込める働きの双方が存在している。自分の魂を排他的な信仰に閉じ込めるぐらいなら、はじめから宗教などに一切の関わりを持たないほうが、人間としてよほど幸せである。

私が「神には一人で立ち向かえ」と主張するのは、そのためである。われわれは、現実から逃避することなく、日々の営みを通じて、みずからの精神生活を深めていく覚悟が必要なのである。伝統的な修行形態すら過剰な形式主義に幽閉されている現状では、出家の意味は、ほとんど無に等しい。

既存の宗教的価値観が崩れ去ってしまった現代でこそ、そういう精神の自由を獲得することが可能になったといえるのであり、しかも国民の大多数は衣食住において、困窮を強いられていない。

暗いニュースの多い昨今ではあるが、考えようによっては現代日本人ほど、恵まれた歴史的環境に置かれている国民も稀である。日本が真に平和国家として、世界に認知されるためにも、われわれ一人ひとりの霊性の向上が、いまほど求められているときはない。